

# 紀 要

## 第10号

— 目 次 —

序	
縄文時代石器研究の方法論序説	(鈴木 康 二)
弥生社会からみた独鈷石	(田 井 中 洋 介)
犬上川左岸扇状地における考古学的研究	(近江歴史クラブ)
犬上川左岸扇状地における須恵器編年試案	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳群について	(北 原 治)
近江における階段式石室の検討	(堀 真 人)
犬上川左岸扇状地における無袖式横穴式石室	(辻 川 哲 朗)
古墳時代後期から終末期にかけての土壙墓の問題点	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳にみられる習俗の研究	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地における馬具副葬土壙墓について	(山 中 由 紀 子)
犬上川左岸扇状地における古墳出土の土器様相について	(中 村 智 孝)
犬上川左岸扇状地周辺の生産と流通の概観	(畑 中 英 二)
東大寺水沼荘の開発	(神 保 忠 宏・畑 中 英 二)
「湖東系軒丸瓦」に関する基礎的考察	(重 岡 卓)
古代王権論にむけて	(細 川 修 平)
日野町出土の瓦器碗をめぐって	(土 垣 幸 徳)
滋賀県伊香郡高月町井口集落周辺の水利と環境	
井口城とその立地	(神 保 忠 宏)
水と環境教育	(佐 野 静 代)

1997. 3

(財)滋賀県文化財保護協会

# 犬上川左岸扇状地の古墳群について

北原 治

## 1. はじめに

琵琶湖に注ぐ犬上川は鈴鹿山脈に連なる青竜山のふもとで湖東平野に流れ出で、長さ6.5kmにおよぶ大きな扇状地を形成している。犬上郡多賀町、犬上郡甲良町、彦根市に属する左岸の扇状地では、近年のは場整備やその他の開発にともなう発掘調査により水田の下に削平を受けた古墳時代後期の古墳が多数存在することが明らかとなった。

当地域の古墳群の位置付けについては、犬上川から取水する井堰や用水路の位置と古墳群の分析を通じて、被葬者達を「水田開発のために配置された指導者と渡来系の灌漑技術・作業員集団」と考えた用田政晴氏、山田友科子氏の研究（文献56）やそれを受け、7世紀から造営が始まる尼子古墳群の被葬者を「渡来系の灌漑・作業員集団」が整備した水田を営営する新たな「入植者集団」とした小泉裕司氏の考察（文献194）がある。また、平井美典氏は湖東式軒丸瓦の分布状況と石室床面を赤彩する地域の特色から古墳造営集団に依智秦氏の一族の筑紫画師氏を推定（文献58）した。

今回は古墳群を立地条件や主体部の変遷から、この地域の古墳群の特色を抽出してみたい。

## 2. 古墳群の概要

犬上川左岸扇状地には10km<sup>2</sup>ほどの範囲に古墳時代後期の古墳が百数十基確認されており、削平を受け水田下に眠っている古墳を含めると優に200基を越える古墳が造られたとみられる。しかし、それらに先行する中期以前の古墳は、主体部に粘土床施設をもつ九條野古墳群（文献49）や西ヶ丘古墳群といった小規模な古墳が丘陵部に数基知られているだけで、周辺の集落も前期・中期と7世紀前半の堅穴住居跡が検出された下之郷遺跡（文献5）や7世紀前半の堅穴住居跡が検出された法養寺遺跡（文献13）の2カ所が確認されたに過ぎず、古墳群が造営を始める6世紀中頃の集落はまったく発見されていない。つまり、大規模な古墳群が造られた当時、このあたりは

無人の荒野に近い状態であったといえる。この無人の荒野に分散して造られた古墳群は扇状地における立地場所から5グループに分けることが可能である。

第1グループは扇状地のなかでもっとも高い位置にあり、背後の山地や犬上川の溪谷から容易に大型の石材を入手できる扇状地に位置する橋崎古墳群（文献56）である。第2グループは扇状地よりやや低い場所から扇状地の中ほどにかけて分布する古墳群である。このうち、犬上川に比較的近い位置にある金屋南・外輪古墳群（文献47・48・61）、北落古墳群（文献26～31）、塚原古墳群（文献38・39）はいずれも規模の大きな古墳群であり、左岸扇状地のなかで中核をなす古墳群といえよう。一方、同じ第2グループに属する堀之内古墳群、寺道古墳群、三博・四ツ塚古墳群（文献35）、横枕古墳群は扇状地の南辺にあり、湖東三山の一つ西明寺のふもとに広がる丘陵に近い位置に造られている。これらの古墳群は調査例が少ないため断定はできないものの、現状で見ると比較的小規模な古墳群が点在している状況が伺え、前者と様相を異にしている。そのため、将来別グループとして分離して考える必要が生じるかもしれない。第3グループは扇状地に数基からなる小支群ごとに散在する尼子古墳群（文献21～25）、栗林古墳（文献50）、小川原古墳群などである。第4グループは扇状地から最末端の湧水点付近に点在する土塙墓と葛籠北遺跡（文献43）で発見された古墳群である。

### (1)第1グループ

橋崎古墳群はこの地域最大の石室をもつ1号墳を盟主墳とし、27基の古墳で構成されている。1号墳は橋崎古墳群のなかで上流側のもっとも高い位置に造られた円墳で、直径15.5m、高さ3.5mを測る。平成2年に多賀町教育委員会によって確認調査が実施された石室は全長10.6mを測る右片袖式の横穴式石室（文献196）であり、床面に段差をもたない通常の石室であることが判明した。玄室は長さ5.2m、最大幅1.9m、高さ2.1mを測るもので、床面には敷

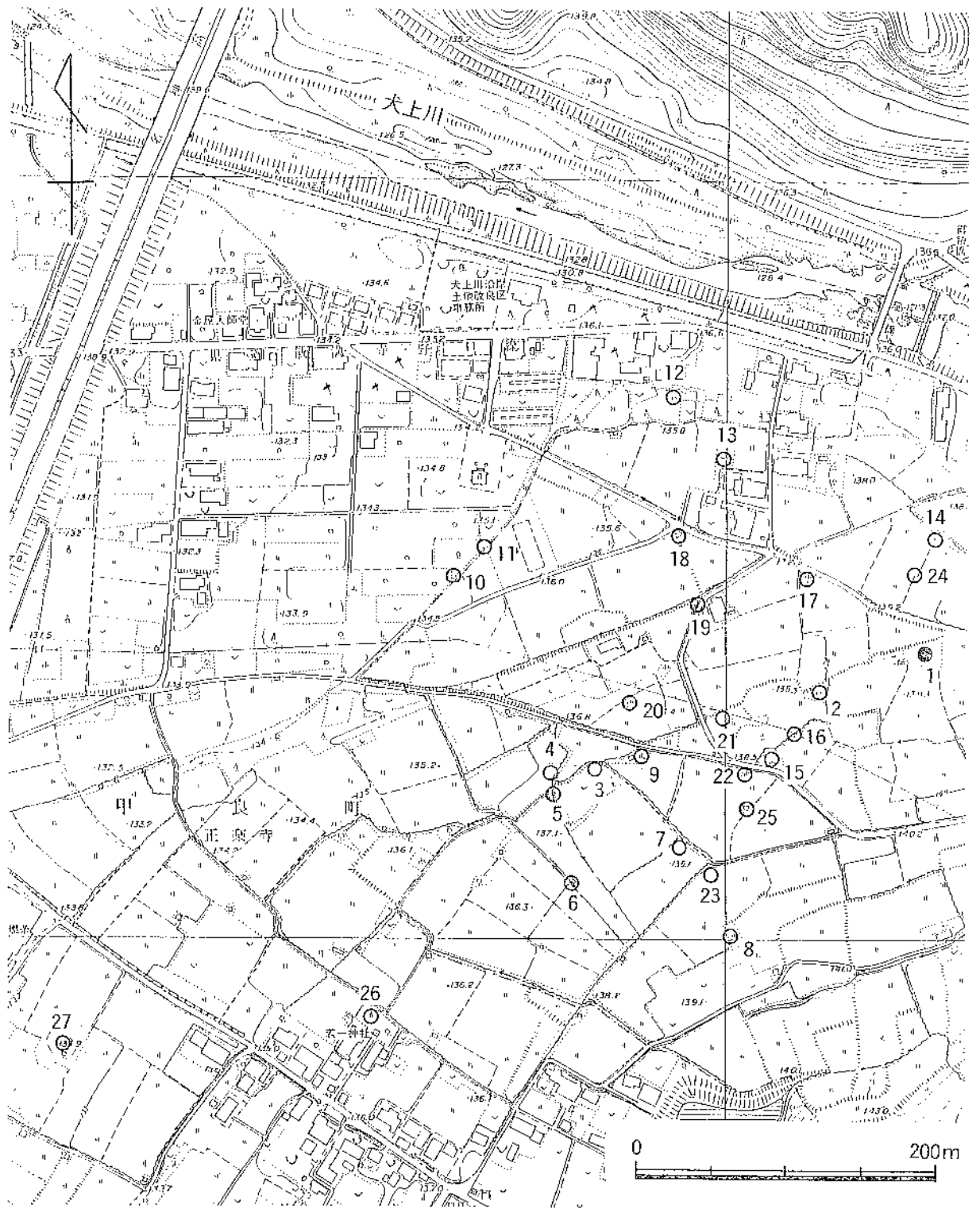


図1 檜崎古墳群分布図(文献56用田政晴氏作図図面に一部加筆)

S=1/4,000

石が敷き詰められていた。石室が早い段階から開口しており、幾度となく盗掘を受けていたことから、副葬品は少量の須恵器と金環が出土しただけであった。須恵器からみてⅠ-中段階（註1）に造られ、Ⅰ-新段階に追葬がなされたようである。石室石材は背後の山地や犬上川の溪谷から運んできたとみられる大型の山石を中心に使用しており、川原石は敷石や壁面の隙間を埋めるために使用されているだけである。また近年、町教育委員会によって数基の古墳が調査されており（註2）、Ⅰ段階～Ⅱ段階を通じて通有の横穴式石室を主体部とする古墳が主流を占めていたようである。

## (2)第2グループ

このグループでは金屋南・外輪古墳群と北落古墳群、塚原古墳群、三博・四ツ塚古墳群について発掘調査が行われている。金屋南・外輪古墳群はグループの中でもっとも上流側に位置しており、工場造成や養護学校建設・ほ場整備に伴って10基の古墳が調査された。

金屋南・外輪古墳群に属する池寺1号墳（文献61）は直径13.6m、高さ2.5mを測る円墳であった。主体部は全長6.8mを測る右片袖式階段式石室であり、この地域の調査された階段式石室としては天井石まで遺存する唯一の例である。玄室は長さ4.5m、幅1.4mを測り、石敷の床面には朱がみられた。羨道は長さ2.3m、幅1mを測る。副葬品は土器（須恵器）43点や馬具（銚1点）、刀子1点、銀環2点が出土したらしい。1号墳は出土土器からみてⅠ-新段階に造られたと考えられる。また、同時に調査された2号墳は1号墳よりも小さく、主体部は階段式石室であったらしい。

犬上養護学校建設にともない調査された金屋南古墳群（文献47）では大型の墳丘をもつ2号墳（直径20m・円墳）や3号墳（18m×14m・楕円形）と直径10m前後の円墳である1・4・5・8号墳が確認された。そのうち、主体部の形態がわかる1号墳と4号墳はともに無袖式横穴式石室をもち、Ⅱ段階に築造された古墳である。また、石室の大きさは1号墳が全長3.7m、幅0.8mであり、4号墳も残存する石室掘方の規模から全長約4m、幅1mと推定され、墳丘・石室ともに規模が似通っている。しかし、1

号墳が床面に段をもたない1A類の無袖式横穴式石室（註3）であるのに対し、4号墳は石室掘方が周溝に開口しないことから、石室入口に段をもつ階段式石室の影響を受けた在地系の2B類の石室が復元できる。

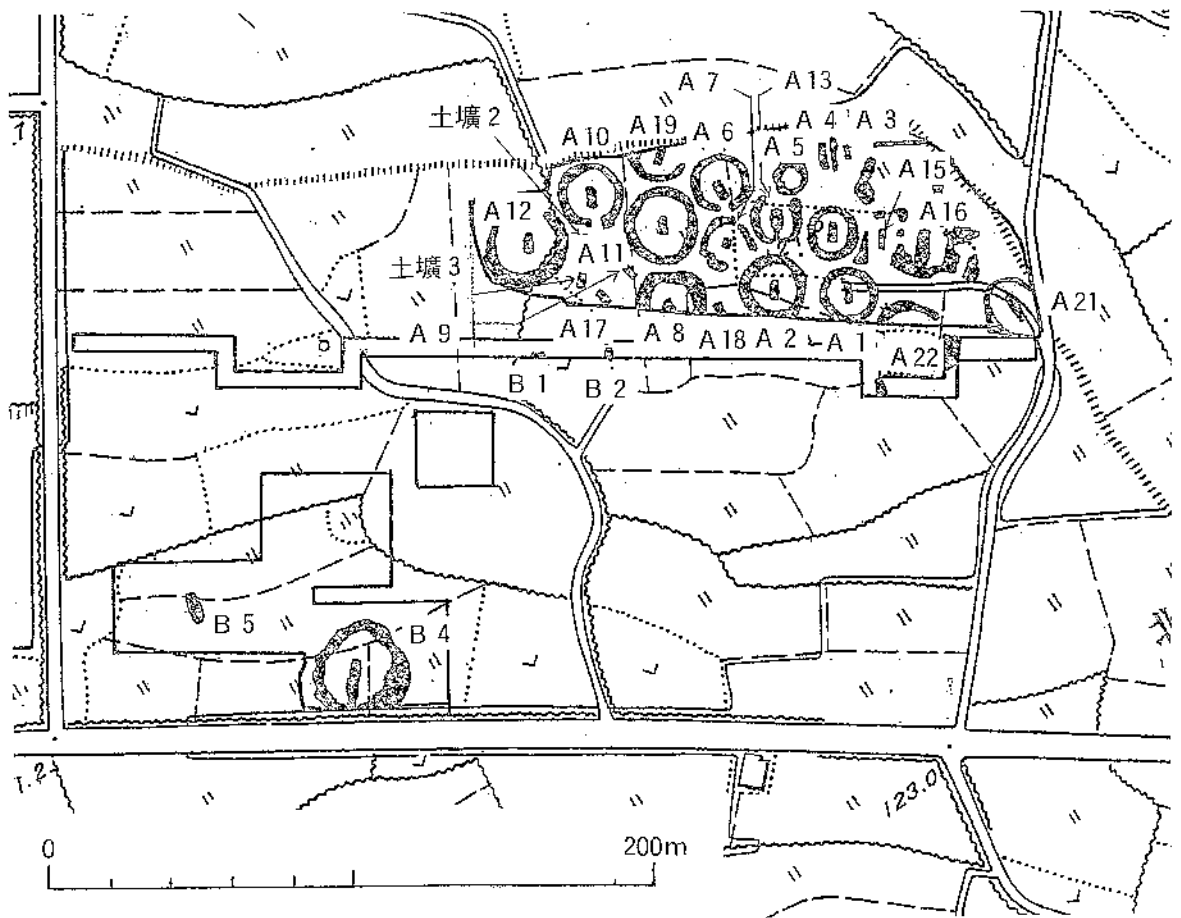
次に、石室石材は川原石が主体を占めるものの、山から運んだとみられる角張った山石も一部含まれていた。

つまり、金屋南・外輪古墳群は、直径20m前後の大型墳を群内に含んでおり、少なくともⅠ-新段階には造営を行っているようである。また、Ⅰ段階には右片袖式階段式石室をもつ古墳がみられ、Ⅱ段階には規模に差がないにもかかわらず、1類と2B類の石室をもつ古墳がみられる状況が確認された。

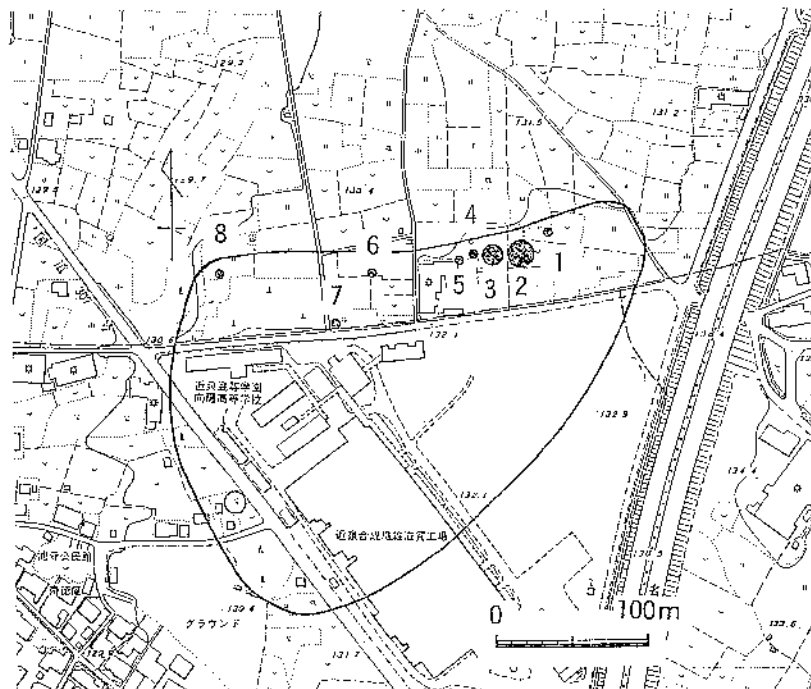
北落古墳群は金屋南・外輪古墳群より約500mほど下流側に展開するこの地域最大の古墳群である。以前は9基程度が知られるだけであったが、平成元年より行われたほ場整備などにもなり発掘調査により新たに31基の古墳が確認された。古墳群は円墳を主体として造営されており、直径21m、高さ3mを測る9号墳を最大とし、平均径12mの規模をもつ。3号墳が方墳（隅丸方形墳）であることからⅠ-新段階より方墳が造られ始めるようであるが、Ⅱ段階においても円墳が主流を占めている。古墳群はⅠ-中段階に右片袖式階段式石室である1号墳やSX9205号墳、同様の石室をもつとみられるSX9209号墳が造られ、Ⅰ-新段階には1A類の無袖式横穴式石室をもつSX9404号墳も造られている。Ⅱ段階になると1A類の無袖式横穴式石室をもつSX9301号墳も造られるものの、SX9302号墳やSX9211号墳など2B類が主流を占めるようになる。

また、石室石材はすべて湖東流紋岩の川原石であり、金屋南古墳群の石室のように山石が混じることはない。石材の大きさも奥膳基底石と比較すると一石あたりの壁面に占める平均面積はおおかた0.08㎡～0.3㎡である。また、ほぼすべての石室の床面（特に玄室床面）に川原石の敷石や小石を使った磔床が設けられており、その1/4にベンガラなどの赤色顔料が散布されていることも特徴の一つといえよう。

副葬品は須恵器が中心であり、石室の遺存状態が

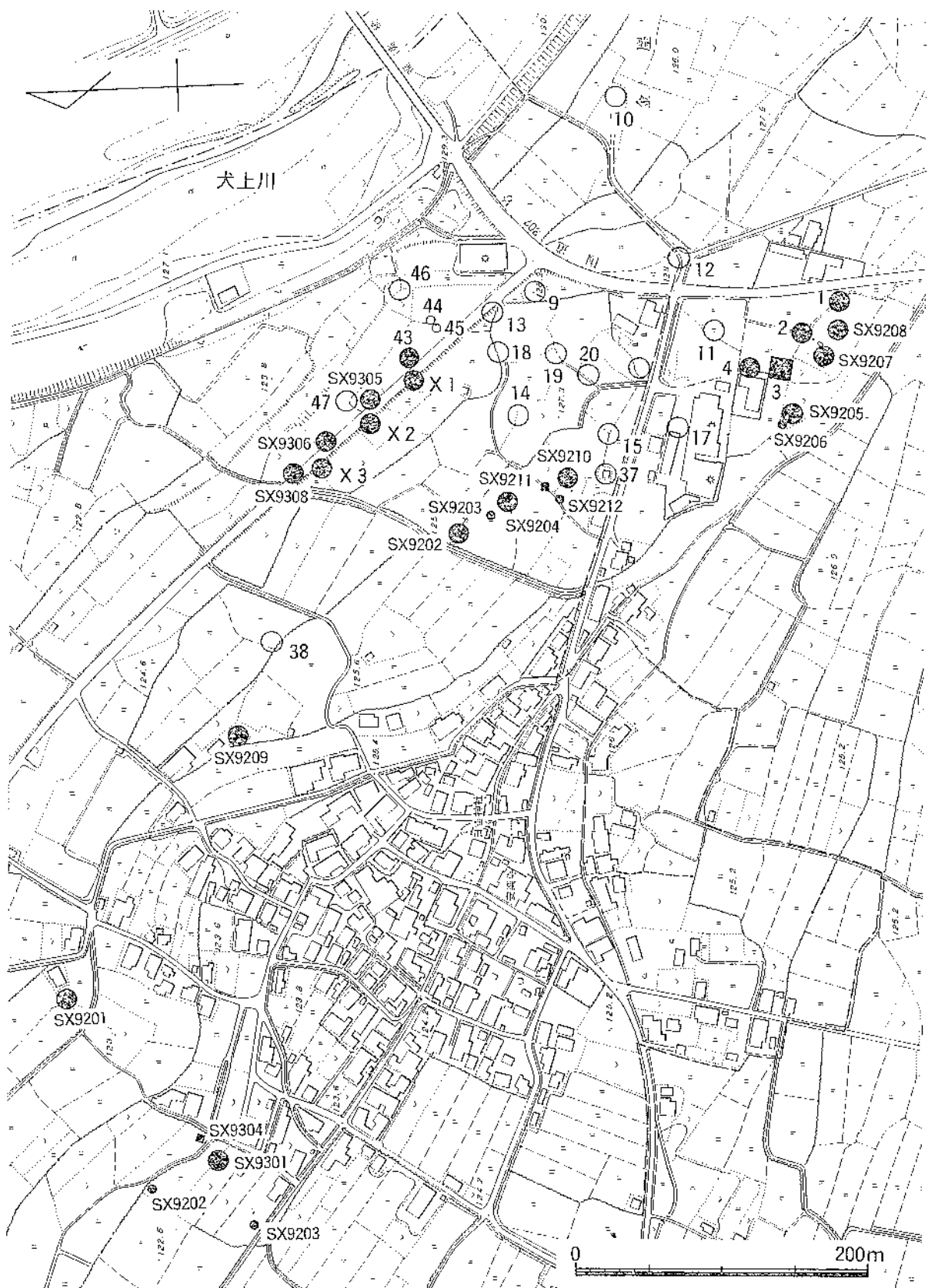


塚原古墳群



金屋南・外輪古墳群

図2 第2グループの古墳群



第3図 北落古墳群分布図（文献30の平井美典氏作図に一部加筆）

悪かったことを差し引いても非常に貧弱な内容である。つまり、他の副葬品では鉄器が馬具や鉄刀がなく、わずかに4基から3本の刀子と4点の鉄鏃がみられ、装飾品もS X9301号墳から釵子とみられる銅製品が出土しているほかは耳環が1点出土しているだけである。

塚原古墳群は平成5年度には場整備と工場造成に伴い甲良町教育委員会により29基の古墳と2基の土壇墓が発掘調査（文献38・39）された（註4）。塚原古墳群ではI—中段階に右片袖式階段式石室をもつA11号墳やa19号墳と土壇墓2が造営され、I—新段階には右片袖式階段式石室とともに全長9mを測る大型の無袖式横穴式石室である1A類のb4号墳が造られている。右片袖式の階段式石室はII段階になってもa6号墳などが造られるが、II段階の主流は2B類とみられる無袖石室となる。また、b5号墳やb8号墳など床面に段をもたない通常の右片袖式横穴式石室もII段階にみられる。これらの右片袖式横穴式石室はいずれも比較的大型の石材で構築されており、全長8.2mを測るb8号墳など大型の石室でのみである。

墳丘規模は直径20mを測る（註5）b4号墳（無袖式横穴式石室）がもっとも大きく、階段式石室をもつa12号墳（直径17m）やa11号墳（直径16m）を上回っている。また、墳形は円墳が主流を占めており、a13号墳のようにI—新段階から方形を指向した古墳が造られ始めるものの、II段階を通じて主流となることはなかった。

出土遺物を見ると階段式石室のa10号墳から鳥形線が出土しているほか、百済の平底短頸壺の系譜につながるとみられる徳利型平底壺（文献33）がa1号墳やa2号墳から出土している。また、古墳群からは鉄刀や馬具なども出土しているようである。

三博・四ツ塚古墳群は扇状地中央やや南よりに位置し、現在4基の古墳が確認されている。平成元年度には場整備にともない甲良町教育委員会により2基の古墳（文献35）が調査された。

四ツ塚3号墳は直径約20mの円墳であり、主体部には大型の石材を使用した床面に段をもたない左片袖式横穴式石室がみられる。石室は全長8.2mを測り、玄室長4.0m、玄室幅1.7mを測る。出土遺物に

は須恵器の杯蓋や高杯が4点が知られるだけであり、造営時期はI—新段階とみられる。三博古墳は10mの方墳である。主体部は基底石まで削平されているが、2B類の無袖石室とみられる。石室は全長4.5m以上、幅1mを測る。造営時期は出土した須恵器壺からII段階とみられる。三博・四ツ塚古墳群では調査した古墳が少ないため階段式石室をもつ古墳の有無は明らかにできなかったが、横穴式石室をもつ大型墳と在地系の無袖石室をもつ小型の古墳が同じ群内に存在するあり方が明らかになった。

つまり、第2グループの古墳群では古墳群に直径20mを越える大型墳を含んでおり、これらのうち主体部が確認されている四ツ塚3号墳や塚原b4号墳に古墳群の中では数少ない床面に段をもたない横穴式石室が採用されている。また、片袖式階段式石室や2B類の石室をもつ古墳はもっとも大きい塚原a12号墳でも直径17m程度であることから、大型墳の主体部は床面に段をもたない横穴式石室であった可能性が強い。そのことから、I段階～II段階を通じて古墳群の核となる大型墳には床面に段をもたない横穴式石室が採用され、それ以外の古墳ではI段階に右片袖式階段式石室をもつ古墳が主流を占め、II段階には在地系である2B類の無袖石室をもつ古墳が主流となる状況が伺える。

第2グループの特色としては、I—新段階に無袖式横穴式石室を採用するものの階段式石室の要素を入れて、すぐに在地系無袖石室である2B類に変質させてしまうあり方や同時期に方墳を導入するにもかかわらず、II段階になっても墳形の方墳化が進まないあり方など墓造りについて「保守的」な様相が伺える。

### (3)第3グループ

尼子古墳群では平成2年度以降の発掘調査（文献21～25）で17基の古墳と1基の土壇墓が発見されており、墳形の判明している古墳のうち11号墳が円墳であるほかは、すべて方墳ないし隅丸方形墳である。また、1号墳のみが全周する明確な方形の周溝をもち、他の浅く部分的に途切れるような周溝をもつ古墳との差を際立たせている。しかし、墳丘規模では1号墳も1辺12mとわずかに大きいだけで、墳丘の平均値1辺9.5mと比べて他を抜きんできているとは

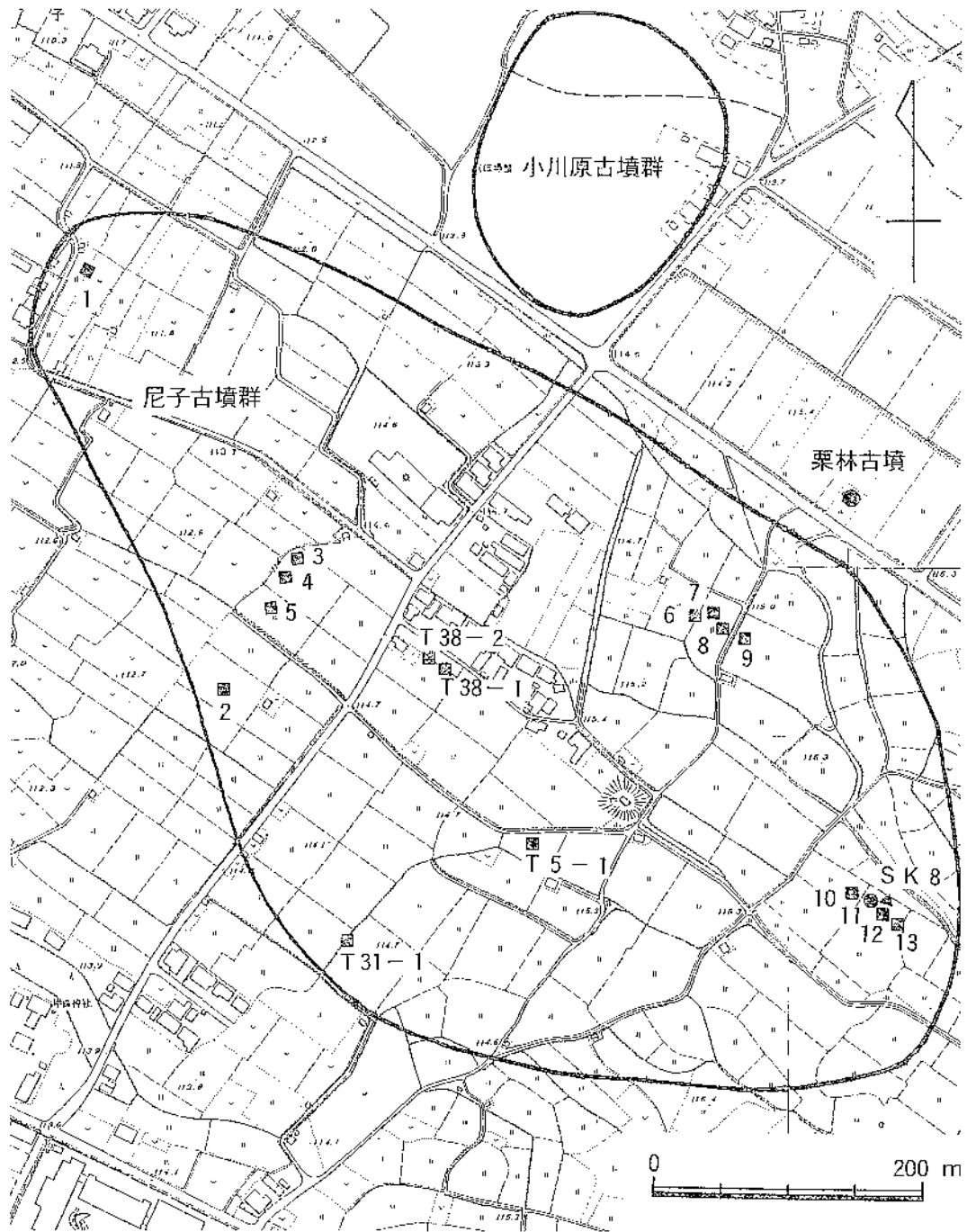


図4 第3グループの古墳群



言い難い。古墳の造営時期は土器を副葬しない古墳も多く明確な時期決定はできないが、おおむねⅡ段階とみられる。石室はいずれも2B類の無袖式石室(10基)や階段式石室の影響を受けた小石室(2基)といった在地系の石室で占められている。

石室は北落古墳群と同様にすべて湖東流紋岩の川原石を使用して構築されているが、奥壁基底石1石あたりの壁面に占める平均面積は0.05㎡～0.15㎡と北落古墳群のものに比べ若干小振りとなっている。

注目すべき遺物としては5号墳や2号墳の周溝から出土した炉壁や鋳滓が挙げられる。5号墳の場合、周溝内埋葬に伴う遺物であり、周溝底で火を焚いた後に鉄釘を使用した木棺を安置し、炉壁や鋳滓を含む土で埋めたと考えられる特殊な埋葬方法に伴う遺物である。この鋳滓は鉄の精錬ないし銅の鑄造にともない生成されたものの可能性が強く、被葬者の生前の生業を探る上で興味深い資料といえよう。また、尼子古墳群での鉄釘出土例は5号墳の石室出土と合わせて2例だけであり、5号墳の被葬者の出自の違いを示すものとみられる。

その他、小川原1号墳から徳利型平底壺が出土している。また、栗林古墳は(文献50)工事中の不時発見のため詳細なことは不明であるが、Ⅱ段階に築造された直径24m前後の円墳である。

第3グループの他の古墳と比べて大きく盟主墳とみられる。第3グループの古墳群は犬上川の支流の旧流路に挟まれた同じ微高地に立地しており、栗林古墳を盟主墳とする一つの古墳群と考えたい。このグループではⅡ段階から造営を始める点や、主体部に片袖式階段式石室や1A類の無袖式横穴式石室が採用されず、2B類の無袖石室や小石室をもつ古墳のみで構成されている点、方墳が主流を占めるなど他のグループと大きく様相を異にしている。

#### (4)第4グループ

第4グループでは土壙墓と木棺直葬墳を主体とする葛籠北遺跡や古墳群に属さず単独に造られた在土北遺跡土壙4(文献19)や小川原遺跡T1の土壙2(文献19)、長畑遺跡の土壙墓などが挙げられる。葛籠北遺跡からは彦根市教育委員会が実施した彦根中学校建設にともなう発掘調査(文献43)で墳丘の削平された8基の円墳と6基の土壙墓が検出された。

古墳の規模はもっとも小さい4号墳で直径7.7mを、もっとも大きい8号墳で直径20.5mを測る。これらのうち、主体部の構造がわかる1号墳は組合せ木棺の直葬であり、Ⅰ-新段階に造営されている。また、土壙墓はⅠ-中段階の3号墓からⅡ段階の1号墓まで継続して造られており、2号墓のように遺物を副葬しないものもあるが、轡や鉄鏃、須恵器9点を副葬した1号墓や須恵器6点や鉄鎌1点を副葬した9号墓など同時期の石室をもつ古墳と大差がない副葬品をもっている。

つまり、葛籠北遺跡の古墳群はⅠ-中段階頃からⅡ段階まで造営が続くにも係わらず、主体部に木棺直葬が採用されている点や土壙墓が多く混在するなど非常に特異な様相を示す。これらの様相がこのグループのみの特徴であるのか、さらに下流の安食西古墳や千尋古墳などの沖積平野に点在する古墳との関連のなかで考えるべきなのかは、平野部の調査がほとんど行われていない現状では論究できない。ただ、葛籠北遺跡付近の水田立地条件は扇状地末端の湧水地帯であり、比較的容易に水田開発が行えたとみられる点で平野部の状況と変わらないことから、この古墳群は平野部との繋がりのなかで成立したと考えたい。

しかし、葛籠北遺跡でみられた多くの遺物を副葬する土壙墓は左岸扇状地の下半に点在しており、この地域の特殊な墓制とみられる。これらは在土北遺跡の土壙4や小川原遺跡の土壙2など単独で造られるもののほか、塚原古墳群の土壙2、土壙3や尼子遺跡4T-6の土壙8のように古墳群のなかに含まれる例もある。特に小川原遺跡土壙2では素環の轡や鉄鏃などともに須恵器の徳利型平底壺も出土している。豊富な副葬品からみて、横穴式石室墳を造営できる力がありながら、あえて土壙墓を造ったと考えられ、さらに、副葬品に百済の平底短頸壺との繋がりが類推される徳利型平底壺をもつことから、被葬者は渡来人であった可能性が高い。

### 3. 小結

犬上川左岸扇状地に立地する古墳時代後期の古墳群を立地場所から4グループに分け、それぞれの様相をみてきたが、グループごとに主体部の形態や造

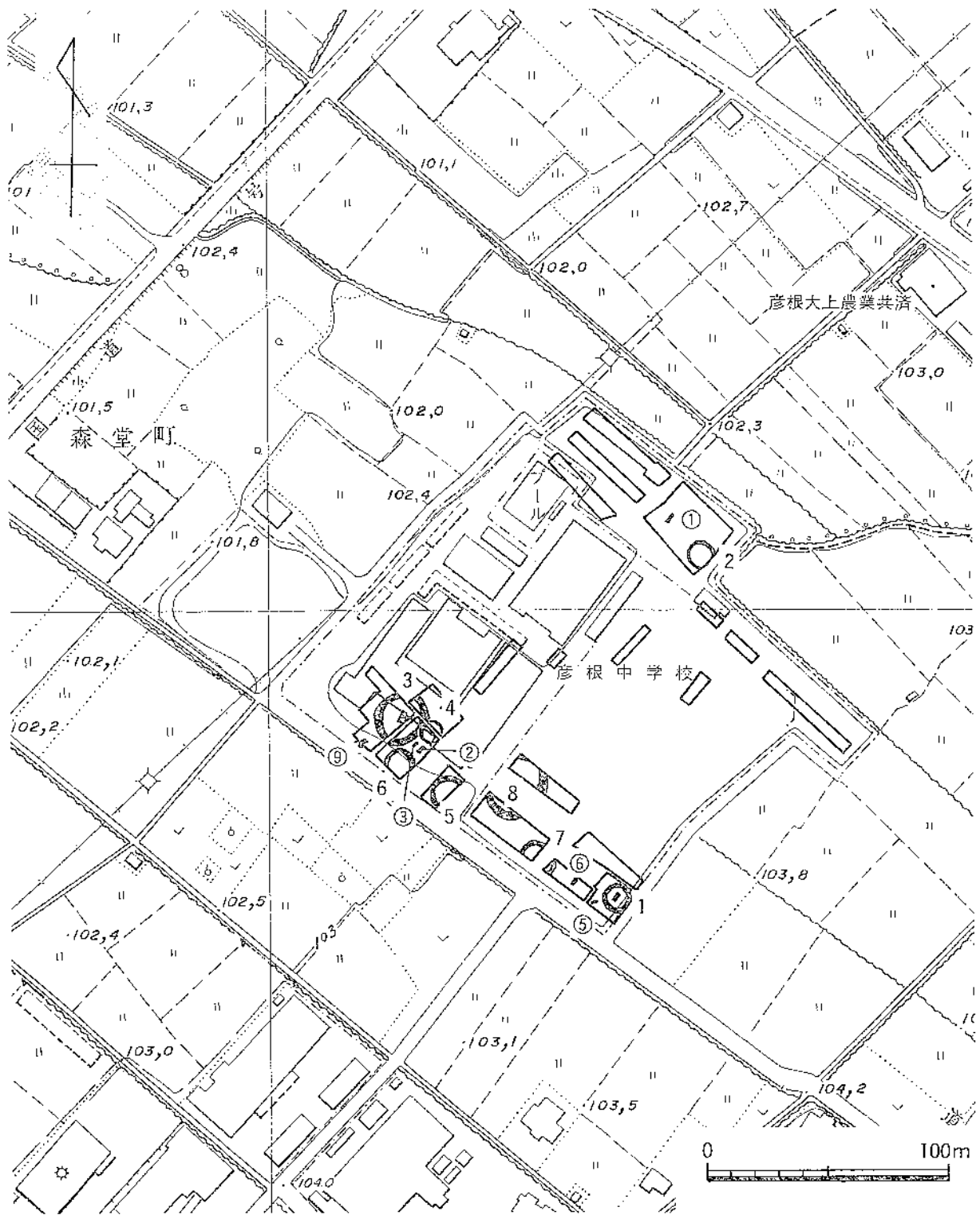


図5 葛籠北遺跡

1 ~ 8 は古墳  
 ① ~ ③, ⑤, ⑥, ⑨ は土城墓  
 S = 1 / 2,500

営時期に差異が認められるとともにグループを越えて共通する特色も存在することが確認できた。それを列記してみると下のよう特徴が挙げられる。

1. 造営開始時期は第1、2、4グループがI—中段階から造営を開始し、第3グループのみII段階から造営を開始する。
2. 主体部については、第1グループでは床面に段をもたない横穴式石室が全時期を通じて主流を占めていたとみられ、第3グループでは基本的に在地系とみられる2B類の無袖式石室（小石室を含む）だけで構成されていた。また、第4グループでは古墳と土壌墓の違いはあるものの木棺直葬が主流を占めるといった具合に単一の形態の主体部を採用している。しかし、第2グループでは古墳群の核となるような大型の古墳が床面に段をもたない通有の横穴式石室を採用するのに対して、一般の古墳ではI—中段階に右片袖式の階段式石室を採用し、I—新段階になると階段石室が主流を占めるものの1A類の無袖式横穴式石室を受容するものが現われ、II段階では一部にI—新段階でみられた石室も残るものの主流は在地化した2B類の無袖式石室で占められるようになるなど時期や古墳の規模によって石室の形態が変化していく状況が伺えた。
3. 第1・2グループの石室形態をみると、袖をもつ階段式石室の場合、すべての石室が右片袖式であり、床面に段をもたない通有の有袖の横穴式石室の場合、多くのものが右片袖式である。  
また、この地域では両袖式石室はまったく採用されていない。
4. 第2・3・4グループでは徳利型平底甕や釵子といった渡来人との関連が考えられる遺物の副葬がみられた。また、この地域のすべての古墳において装飾付馬具や太刀など豪華な副葬品はみとめられず、副葬品は全般的に貧弱である。
5. II段階から造営を開始する第3グループの石室は第2グループのII段階の主流を占める在地系無袖石室である。このことから、第3グループは第2グループから分派した集団と考えられる。さらに推察すれば、第3グループの古墳は

方墳が主体を占める点やこれまでこの地域に見られなかった製鉄技術をもつ者も被葬者集団に含むことから、その集団はこの地域を主体としながらも地域を越えた再編の結果、新たに生じた集団であったと考えたい。

6. 石室石材を比較してみると、グループに関係なく扇状部に近い古墳群ほど山地ないし犬上川上流の溪谷から運んだ石（山石）が多く使われ、北落古墳群より下流では川原石のみが使われる状況が見て取れる。これは古墳群ごとに石材採取場所の違いに起因するものと見られる。

こうしてみると、犬上川左岸扇状地に造られた古墳群はグループごとに多様な主体部や群の構成もっており、その被葬者集団も個々別々の集団であったと考えるのが妥当であろう。その中で、扇状部の最上部に位置する檜崎1号墳はこの地域において最大の石室をもつことから、第1グループ（檜崎古墳群）の集団が他の集団よりも抜きん出た存在であった可能性も捨てきれない。しかし、他のグループにおいてもほぼ同様の盟主墳が存在しており、集団ごとの格差は小さかったと推測される。被葬者像については扇状地の開発に結びつけて「扇状地開発のために派遣された指揮者と灌漑技術・作業員集団」（文献56）とされてきたが、これについては下之郷遺跡において6世紀後末～7世紀初頭の水路が検出されており、この地域の水田開発が6世紀から始まっていたことが確実であるため、被葬者のなかには扇状地の開発者も含んでいた可能性は捨てきれない。しかし、開墾間もない痩せた土地をもってして200基近い古墳を造営する力は到底考え難く、むしろ、この地域が犬上郡の中でもっとも後期古墳が多く造られている場所であることや、他の場所に目立った大型の古墳群が存在しないことから、これらの古墳群は平野部を含めた犬上川流域全体の集団の墓域と捉えたい。つまり、犬上川左岸扇状地の古墳群は犬上川で結びついたいくつかの対等な集団が犬上川が山間部からまさに流れいずる場所、生活圏のなかでの水源地に営んだ墓地であったと思われる。

#### 註

(1) 畑中英二氏の前掲論文「犬上川左岸扇状地における須恵

- 器編年試案」の基準による。
- (2)多賀町教育委員会にご教示を戴いた。
  - (3)辻川哲朗氏の後載論文「犬土側左岸扇状地における無袖式横穴式石室」の基準による。
  - (4)工場造成にともなう発掘調査で検出された一群を仮にA支群とし、「a 1号墳」と表記し、平成5年度に実施

- されたほ場整備関連の発掘調査で検出された一群をB支群とし、「b 1号墳」表記する。以下、本共同研究では、上述の表記に基づく。
- (5)報告書には周溝を含めた直径が25.1mとあり、周溝の幅が3.3m～3.9mと記されているため、墳丘径は20m前後であろう

## 編 集 後 記

『紀要』の第10号をお届けいたします。

本号には多数の寄稿をいただいたため、紙幅の関係上、体裁を若干変えざるをえなくなりました。見にくい点等があらうかと思いますが、どうか御了承下さい。

さて、本号をもって、この『紀要』も10歳を迎える事になりました。ここに至る間には、多くの方々の御指導・御協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。今後とも職員の研究活動の拠点として、さらに研鑽をつんでいきたいと考えておりますので、皆様からの積極的な御叱正・御鞭撻を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

(T・M、T・T)

平成9年3月

## 紀 要 第10号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会  
滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL:(0775-48-9780)

印刷・製本：明文舎印刷商事株式会社  
滋賀県長浜市森町中久保386